

令和6年度 小平市立花小金井南中学校 学校評価報告書									
学校教育目標 豊かな心を養い 学力、体力の向上を目指し 未来へはばたく人物を育成する 1. 心身ともに健全で自らを鍛え努力する人 2. 進んで学び 社会のために尽くす人 3. 認め合い 支え合う心優しい人									
目指す学校像(ビジョン) 【目指す学校像】 ○居心地のよい学校 ○分かる喜びのある学校 ○あいさつが自然と出る学校 ○保護者・地域から信頼される学校 【目指す児童・生徒像】 ○自己実現のために絶え間なく努力する生徒 ○思いやりの心をもち、心も体も豊かな生徒 【目指す教員像】 ○生徒一人一人を認め、伸ばそうとする教師 ○生徒・保護者から信頼される教師 ○生徒の自己実現を支援する教師									
前年度までの学校経営上の成果と課題 成果：○授業規律の確立 ○挨拶をはじめ礼儀指導 ○主体的に学習に取り組む生徒の育成に向けた授業改善 ○読書活動の充実 ○不登校や特別な支援が必要な生徒への対応 ○地域人材の活用(コミュニティ・スクール) 課題：○家庭学習の定着 ○地域連携 ○小中連携									
	具体的方策	第1回評価		成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策	
		取組評価	成果評価		取組評価	成果評価			
学力向上	○小グループによる学び合いを取り入れる。 ○ICT教材の積極的な活用を授業に取り入れる。 ○学年ごとの授業案を1年に2回実施する。	4	4	2年間の研究を経て、主体的・対話的で深い学びを実現するために全教師が積極的に授業改善や評価方法などについて実践的な研修を進められた。学習者用端末の活用やグループ活動を取り入れた授業を行い、効果的に活用することなど教師間の情報共有システムを確立し、さらによりよい授業実践を進めていく。	4	4	・花南中の前向きに取り組む姿勢は、素晴らしい。学習者用端末の活用など、時代に合わせた教育のやり方に取り組もうとしている先生方の努力がありがたい。 ・週の1回実施している放課後教室については、それぞれの日に目当てを設け、生徒がより興味をもって取り組めるよう工夫している。少しずつではあるが、参加生徒も増えてきて学習の習慣化につながれたと感じる。	・2年間の研究の成果を引き継ぐため、全教師が研修を通して意欲的に授業改善に取り組む姿勢が見られた。小グループによる学び合い活動やICTの積極的な活用について、各学年ごとの研究協議会にて共有、検討が行われ、定着しつつある。令和7年度も継続して授業研究に取り組むと同時に、ICTの活用については生徒だけではなく、教員側のスキル向上を目標に研修の充実を図る。	
	○朝読書の始業前からの読書活動を実施し読む力を向上させる。 ○定期テスト前における家庭学習の計画と実施の学習指導を行う。 ○放課後学習教室を毎週水曜日に実施し、授業の振り返り等を行う。	3	3	朝読書は定着し、落ち着いた雰囲気の中で1日をスタートさせることができる。定期テスト前には学習計画表を作成し、計画的に学習に取り組むことができる。毎週1回行われる放課後学習教室は生徒が気軽に興味をもて参加できるように、地域学習コーディネーターが発案し、講座を工夫している。このような取組を通じて学習の習慣化をさらに進めている。	3	3		・今年度から学習用アプリを導入したことにより、学習者用端末の持ち帰りの機会を増やし、家庭学習の定着を図ろうと試みた。家庭学習の習慣化については、家庭との連携や放課後学習教室の活用の仕方など、課題がある。地域学習コーディネーターとの連携を軸に、学校、家庭、地域の協力を得ながら対応する。	
健全育成	○生徒会が主になり生徒朝礼の計画的な運営と実施を行う。 ○定期的にあいさつ運動を実施するとともに日頃からの声かけを行う。	3	4	生徒会活動を通じて、生徒の自主性は高まっている。一方で、生徒が自主的に取り組むために教員のサポートが重要になっている。教員の負担が大きくなりすぎないように活動をしていくことが必要である。あいさつについては、朝礼等の講話や学校便りの発信を行い、校内でのあいさつだけでなく、地域でのあいさつが自然にできるような生徒の育成を今後の課題として進めている。	3	4	・あいさつに課題があるという報告があったが、学校に出向いたときにも生徒にあいさつをしつかりとしていけなかった。 ・教師は教えるだけでなく、生徒と共に実践したり議論したり一緒に考えたりする時間も大切である。目先のことにとらわれず、他者を思いやる余裕が持てるような道徳の時間にならねばならない。	・生徒会活動を通じて、生徒の自主性は高く、積極的に取り組んでいる。生徒のあいさつに関しては、生徒側に働きかけるだけではなく、大人側から歩み寄り声をかける姿勢で接し、温かく居心地がよい学校を目指す。	
	○学校行事、生徒会活動等において生徒の活躍の場を増やすことにより、より良い人間関係を形成する能力を向上させ、いじめのない学校を推進していく。 ○特別活動の取組を推進する。 ○生徒の心の育成を推進し、特別な教科道德の授業を充実させる。	3	4	学校行事は計画通り実施できている。特別活動に力を入れ、人間関係の形成や、リーダーシップを育てることが他者との関わりの中で形成できるようになっている。そして学年を超えて一緒に活動できる取組を増やし、健全育成を進めていく。いじめ防止対策推進法の理解を深め、法令上でのいじめの認識をしっかりと。対応すること、いじめのない学校を目指す。SNSの規範意識については、概ね理解が進んでいるが、個人情報や動画投稿などのトラブルも起きており、今後も入学する1年生から保護者も一緒にしっかりと指導し、対応していくことが必要である。	3	4	・「相手と嫌だと思ったら、それが法令上のいじめだ」という、「いじめは許さない」という姿勢は大切であるが寛容さを教えないと、強い人間はつねれないのではないかと。	・令和6年度の学校行事は計画通りに実施することができた。今年度よりこいだり特別活動の日が設定され、各中学校区内の小学校と中学校の話し合いにおける交流もあり、小・中連携が図られた。引き続き、令和7年度も特別活動についての準備を進めている。	
体力向上	○目標を超えた生徒に対して表彰するほか、努力した成果を目に見る形で朝礼や学校便り、体育科便り等で周知することで意欲や達成感を高める。 ○授業や行事を通して生徒の運動への意識と技能を高める取組を行う。 ○持久力の向上を中心とした取組を継続して行う。	3	4	普段の体育の授業や部活動を通じて、持久走や補強運動などに取り組み、成果を上げている。持久走の取組については、体力向上のみならず、目標を乗り越えようという限界に挑戦したり、自分自身をコントロールしたりする力もついている。今後も引き続きこのような取組に力を入れていく。生涯スポーツなども考慮し、運動の苦手な生徒への関わりも丁寧に行っていく。	3	4	・花南中の持久走への取組は素晴らしい。持久走で培われた体力は大きなものがある。タイムを励みに頑張る生徒も多いので、努力できる人に、努力する楽しさを感じられる体験となればとても有意義な取組である。	・これまでの数年間、普段の体育の授業や部活動を通じて、持久走や補強運動などに取組み、成果を上げている。全国体力テストの結果にも反映されている。苦手な生徒もいるので、無理をさせることなく努力する楽しさを感じられる体験になるように取り組む必要がある。令和7年度も、配慮を要する生徒にも、運動が苦手だと思わせないよう指導の工夫を図る。	
キャリア教育	○3年間を見通したキャリア教育を通じて望ましい勤労観・奉仕の精神を育成する。 ○係活動や委員活動を充実させ、自ら判断し主体的に行動できるようにする。 ○地域へのボランティアなどの情報を周知し、ボランティアへの参加機会を増やす。 ○系統的な進路指導や情報発信を行う。 ○進路説明会等を充実させる。(高校の先生を招いた説明会や卒業生の話を聞く会などの設定など)	2	4	職場体験が実施できるようになり、3年間のキャリア学習の流れができていく。充実した体験活動から得られる力は大きく、今後もよりよい体験活動を取り入れていく。ボランティア活動については、今後の課題である。地域からのニーズに応えられるように、生徒への周知や勧誘なども組織的に進めていく。	3	4	・職場体験が実施されることはとてもよい。様々な体験の機会として地域からもボランティア等、依頼できれば今後の活動が広がる。なかなか時間が取れないが、地域の行事、取組に対して運営、計画の段階から参加できるとよい。 ・教師の取組も保護者の評価も良いことが評価できる。	・地域教育コーディネーターの支援もあり、体験先との連携がより円滑に行われ、生徒は安心して体験することができた。今後は、地域行事や青少年と連携し、ボランティア活動など組織的に取り組む。	
		4	3	進路指導としては、系統的に学習することができている。この3年間で、入試の手続きの方法が大きく変わり、保護者の協力が必要な場面が増えた。インターネットでの出願手続きなどは当たり前の時代となった。情報発信の工夫が必要である。	4	3		・アンケートで進路指導について早めに知りたいという意見をいただき、地域のニーズに応えられるように、進路指導に関しては、1・2年生向けに進路説明会の動画配信を行ったり、1年生の内に推薦基準を保護者会にて周知したりするなど、早めに意識付けすることができた。	
特別支援教育の推進	○特別支援委員会を中心とした組織的な取組(SSWやSCの積極的な活用)を行う。 ○特別支援教室専門員を活用し、特別支援教室と通常の学級の連携を強化する。週に1回の担任と専門員の情報共有を行う。 ○不登校対応として別室登校の組織的な運営を行う。	3	3	特別支援教室専門員の配置や、巡回校の指導担当教師のご協力により、特別支援教室に通室する生徒の情報共有や支援方法などの連携は格段によくなった。特別支援委員会に特別支援教室専門員と巡回校の教員が参加することで、多くの情報も、学校全体に伝わることも大きな前進であった。別室指導支援員の配置の成果が出てきており、常に別室に支援員がいることで、安心して登校できる生徒が増えていることは大きな成果である。	3	3	・組織的に対応されていて、情報共有や連携がよくなったことは、生徒のためにもとてもよい。これ以外にも、より一層の連携強化をお願いしたい。 ・「通常学級の生徒とのふれあいを楽しみにしており、通常学級の生徒から、からかいなどの言葉が一切ないことは喜ばしい」との報告を聞くこと、花南中らしいと感じることに、交流が順調に進められていると感じる。	・特別支援委員会を中心に、特別支援教室専門員、特別支援教室担任、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、特別支援コーディネーター(各学年・養護教諭)、生活指導主任、管理職との情報共有、連携については強化できた。今後も引き続き、組織的な対応をしていく。	
	○通常の学級と特別支援学級において行事等での交流を進める。 ○通常の学級生徒への理解教育を推進する。1年生への特別支援学級の理解教育を実施する。また、行事等を中心とした交流を進め、生徒の共生社会への意識を高めさせる。	3	4	特別支援学級の理解教育は定期的に行われ、通常の学級の生徒へのアンケートなどでも「特別支援学級の生徒との交流をしたい」という割合がとても多い結果が出ている。運動会や学年集会での交流、さらに通常の学級と特別支援学級の教員の交流なども進めていく。地域にも自立支援施設などがあることなど、共生社会に向けてさらに意識を高めさせていく。	3	4	・今年度よりスクールサポートスタッフが2名体制になり、教員の業務軽減につながった。また、紙ベースで配布していたものをメールで配信することができた。 ・部活動指導員の配置については、より実態に応じた運用がなされるように、計画的に実施していく。	・特別支援学級の理解教育については、教員同士の授業研修などを積極的にを行い、情報共有や連携が強化された。このことが、生徒の交流を進め、つなげることができた。令和7年度も引き続き、特別支援学級の理解教育を推進する。	
働き方改革	○配信メールやPC等を活用し、普段の業務の軽減や授業準備等の軽減を図る。 ○スクールサポートスタッフや地域人材を積極的に活用し、校務軽減を図る。 ○教職員の自己申告面接の中で、担当行事等の見直しを提案し、1年間かけて精査する。 ○地域教育コーディネーターを活用し、地域人材が積極的に関わるような取組を行う。 ○職場体験を地域学習コーディネーターが調整する。	3	3	スクールサポートスタッフの配置が1日2名となり、活用が格段に進んだことによる教師の負担軽減はとても大きい。信頼できる人材がこのような立場で学校に関わることができれば力になるか多くの教師は実感している。保護者向けの通知文なども保護者の理解を得てメール配信が済まそうにしている。地域の人材活用がさらに進んで、教師の働き方改革がさらに進んでいくことを目指す。	3	3	・働き方改革という言葉が目立っているが、子どもたちの成長を喜んで報われる仕事であることを忘れずに、地域と学校の役割を再確認する必要がある。今後もより一層の地域の人達の協力を得ながら、働き方改革を進めていくとよい。 ・地域学習コーディネーターを中心に定期的に実施することができている。今後も放課後教室や各種検定試験が継続し、このまま軌道に乗って欲しい。	・今年度よりスクールサポートスタッフが2名体制になり、教員の業務軽減につながった。また、紙ベースで配布していたものをメールで配信することができた。 ・部活動指導員の配置については、より実態に応じた運用がなされるように、計画的に実施していく。	
		3	3	放課後学習教室については、定期的に実施することができた。定期的に実施することにより安心して学べる場所を提供することができている。職場体験の事業所との調整についても地域学習コーディネーターが対応することができた。このような流れができていくと、今後の地域の事業所との連携も進んでいく様々なる関わりも増えてくるようになっていく。検定試験については、大きな成果を上げているが、地域との連携を目指し、コミュニティ・スクールでの運営に移行できている。	3	3		・地域教育コーディネーターについては、職場体験の事業所との調整についても軌道に乗り、地域の事業所からの連携も進めていくことができた。このことが、学校への信頼につながり、より地域との関わりを深め、安心・安全に活動することができた。検定試験については、コミュニティ・スクール主体の運営に向けて、地域との連携を進め、円滑な運営を目指す。	
コミュニティ	○防災危機管理課と連携し、避難所運営マニュアルを完成させる。(地域防災分科会) ○検定推進委員会を組織的に運営する。(学習支援分科会) ○地域と保護者の相対意識となる「花みなみカフェ」を定着させる。(家庭支援分科会)	2	2	昨年度の都型の学校経営協議会から引き続き、3つの分科会を継続し、それぞれの分科会でメインとなる取組についてさまざまな検討を進めている。実際にやってみた中で課題を見つけてさらに前に進めていきたい。情報発信はできるだけ、メールや通信を発行して地域や保護者に周知していく。	2	2	・分科会を重ねるたびに、活動が盛り上がりつつあるように感じる。 ・ただし、今年度の広報としての「まほろば」は発行されていないので、地域や保護者へ情報発信ができなかった。周知方法にも工夫が必要だと感じる。	・各分科会では順調に活動できた。地域防災分科会では、避難所運営マニュアルが完成した。学習支援分科会では、検定推進委員会の組織的に運営した。家庭支援分科会では、地域と保護者の相対意識となる「花みなみカフェ」の定着に向けて、月1回のペースで定期的に実施した。これらの活動実績の周知については課題があり、CSだりの発行やホームページへの掲載など、地域・保護者への周知を確実に行う。	